

CIMへの道筋 設計者の挑戦②

新提案への流れつくる

「待ったなし。BIM/CIMの一般化に向け、さらにスピードアップする」と、オリエンタルコンサルタンツの崎本繁治取締役執行役員関西支社長兼四国支社長兼中国支社統括は前を向く。同社は5年前から分野ごとにプロジェクトを定め、組織内でCIM対応を重点化してきた。手綱を締める意味も込めながら「本腰を入れ直す」と、2

CIMの道筋

設計者の挑戦 ②

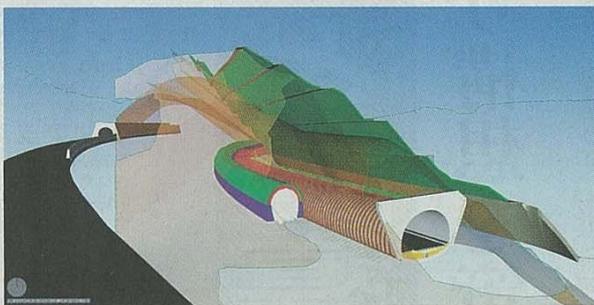
オリエンタルコンサルタンツ

018年10月にCIM推進強化委員会を発足した。一般化へのビジョンを掲げ、分野ごとに今後3年間でやるべき方向性も示した。

目指すのは、上流から下流まで全ての段階に関与し、CIMによるマネジメントを包括的に実施できる組織だ。3次元設計に移行できれば、仕事のやり方も視点も変わる。CIMに軸足を置くのは生産性革命や品質向上、モチベーションアップだけではない。「組織として知的生産を押し進めていきたい」との思いが根底にある。

強化委員会には各分野のワーキンググループや各支店がぶら下がり、メンバーは総勢100人にも及ぶ。同時に最先端の技術を集約・共有する部隊として、高度化推進室の中にCIM推進チームも設けた。チームリーダーを務める三住泰之関西支店構

造部次長は発注者ニーズや最新ツールを社内伝達する中で「新しい技術提案に率先して取り組む流れを早急につくりたい」と力を込める。



トンネル部門は施工情報を集約できるデータベース的な仕掛けを提案

ビジョン示し一般化へ本腰

河川部門では維持管理を見据え、あらかじめ設備類など全てのパーツを属性情報として入れ込む提案を進めているほか、点群データで災害時に堤防が壊れやすい場所を予測する事前防災のシステムも開発中だ。西大輔関西支社河川砂防・港湾部次長は「これからも付加価値としてチャレンジしていく」と強調する。

トンネル部門も維持管理に使うため、地質状態も含め施工情報を細かく集約できるデータベース的な仕掛けを提案している。河田皓介関西支店総合技術部技術主査は「ひび割れや漏水発生時の要因分析として活用できる」と説明する。構造部門のよつに海外プロジェクトで独自提案を検証する動きもあり、長さ140mに及ぶマニラの鉄道業務では設計時に路線や周辺状況を詳細に把握できる仕掛けづくりに挑む。三住氏は「案出しの段階だが、国内にも応用できる」と先を見据える。

道路部門はルート選定時から概略設計までプロセスが長期にわたることから、管理情報の一本化を提案中だ。蔵下一幸関西支社道路部部長は「事業の変遷が把握できれば発注者内の情報引継ぎや地元協議への対応にも有効で、現在進行中の路線選定業務で試みている」と明かす。奈良県田原本町ではECI（施工予定技術者事前協議）方式が採用された橋梁の架け替え工事に参加し、太田弘次関西支社構造部副主幹は「施工者との情報共有などマネジメントツールとしてもCIMが大活躍した」と振り返る。

国土交通省がBIM/CIMの活用を強めるにつれ、建設コンサルタントへの要求は多様化、高度化している。同社は要求事項（リクワイヤメント）への着実な対応にとどまらず、他社との差別化提案づくりに力を注ぐ。崎本氏は「新しい革新的なアイデアを考えることは楽しく、そのようにワクワクしながらチャレンジする気持ちが組織力を生む」と手応えを口にする。